

マクニースの「コード」の宗教性と世俗性

辻 昌宏

大会当日は、「ルイ・マクニースにおける宗教—誤解と和解」のタイトルで発表を行った。本発表では、詩人ルイ・マクニースにおける宗教的モチーフを、彼の父フレデリック・マクニースの来歴——特に Irish Church Missions (以下 ICM) における活動——との関係において検討し、「誤解」と「和解」という二つの主題に着目した。

マクニースは一貫して自らの宗教的無関心あるいは中立性を表明してきた。‘Autobiography’や‘Carrickfergus’などの詩において、彼は「司祭の息子」である自分を冷笑的に描き、父の信仰と距離をとっている。しかし、このような態度の背後には、単なる宗教への忌避ではなく、父の信仰の来歴についての「誤解」があった可能性が高い。すなわち、彼は父が国教会 (Church of Ireland) の聖職者であったことを知ってはいたが、その信仰の背景にある ICM での教育や、さらに遡る祖父ウィリアム・マクニースの改宗活動、1879 年のオメイ島事件などを、知らなかったのではないかと考えられる。トラウマティックな事件のため、父が子どもたちに語らなかった可能性が高いからだ。

ICM は 19 世紀半ばに設立された福音主義的宣教団体であり、アイルランドの貧困層に対するカトリックからの改宗を強力に推進した。カトリックの子どもたちに教育をほどこし、そこから改宗へ導く活動を展開し、1879 年にはゴールウェイ州オメイ島における ICM の施設が襲撃される事件が発生した。詩人の祖父ウィリアムと祖母アリス・ジェインは二人とも ICM 学校の教師であり、ウィリアムは襲撃され、命をおびやかされた。カトリックの信者たちが数十人逮捕され、ウィリアムおよびその家族はダブリンに移住することになった。ウィリアムの息子フレデリック (詩人の父) はその時 13 歳だった。このトラウマティックな事件を経験しつつも、フレデリックもまた ICM 系の学校で学び、その後、トリニティ・コレッジに神学し、宗教的使命感のもとで聖職者となった。

ところが、詩人ルイにとって、父は形式的・抑圧的な宗教の体現者であり、父がその内面の経歴や葛藤について語ることは少なかったように見える。マクニースは少年期に母を失い、父との関係は希薄であった。こうした状況のもと、父の信仰は詩人にとって理解の外部にあり、むしろ自己の自由を阻害するものとして映っていたのではないか。宗教そのものへの拒絶というよりも、父が経てきた過酷な文脈を知らぬままの「誤解」として、彼の宗教的距離化は生じていたと捉えることができよう。

たとえば自伝的な詩 ‘Carrickfergus’ の中には

Carrickfergus (1937) から (部分)

The little boats neneath the Norman castle,
The pier shining with lumps of crystal salt;
The Scotch Quarter was a line of residential houses
But the Irish Quarter was a slum for the blind and halt.

(...)

I was the rector's son, born to the Anglican order,
Banned for ever from the candles of the Irish poor;
The Chichester knelt in marble at the end of a transept
With ruffs about their necks, their portion sure.

この詩の書かれた時期のキャリックファーガスの人口構成を見ると、1911 年時点で国教会系 23% (中心部で

は 29%で郊外では 16%)、長老派 41%、メソジスト 5%、独立派（プロテスタントの一派）11%、カトリック 15%となっている。詩のなかに出てくる ‘Irish Quarters’（貧しい地区—教区教会のすぐ南西の地区）は、1901 年時点で、国教会系 40%、カトリック 18%であり、カトリック系は意外にも少数派なのである。ちなみに、‘Scottish Quarter’（相対的に豊かな地区—もともとはスコットランドの漁民が移住）では長老派 40%となっている。

以上の統計から Scottish Quarter と Irish Quarter は、宗教上の区別ではなく、階層・階級の区別が大きいことがわかる。註釈なしで Scottish Quarter と Irish Quarter と書いた場合に、Irish Quarter はカトリックが集中して住むところかという誤解が生じるわけだが、マクニース自身も誤解していた可能性があると考ええる。マクニースは 10 歳で親元を離れボーディング・スクールで寄宿し、パブリック・スクール、オックスフォード大学へ進学するので、基本的には 10 歳以降は休暇中を除いて、家族と一緒に暮らしていないのである。だから父に対する誤解を解くチャンスも青年期には少なかったと考えられる。

この確執は、ルイの晩年に書かれた詩 ‘The Coda’（1963 年）やその時期の詩において、溶解する。

Coda

Maybe we knew each other better
When the night was young and unrepeatd
And the moon stood still over Jericho.

So much for the past; in the present
There are moments caught between heart-beats
When maybe we know each other better.

But what is that clinking in the darkness?
Maybe we shall know each other better
When the tunnels meet beneath the mountain.

この詩は一義的には男女の理解の困難さを 3 つの連で語ったものと考えられる。第一連では ‘Maybe we knew each other better’ とあり、第二連では ‘maybe we know each other better’ となり、第三連では ‘Maybe we shall know each other better’ とよく似たフレーズが時制を変えて繰り返されている。第一連では男女がつきあい始めで、深い関係はなく、それで互いをよく知っていたというのは逆説的だが、互いをよく知ろうという気持ちが強かったという意味にとりたい。第二連で、現在の話となり、動悸と動悸の間に捉えられた瞬間というのは肉体的に抱擁し相手の動悸が感じられる時、つきあいが深まっていくなかでのときめきの瞬間ともとれる。抱擁をかさね、ときめきを重ねて、理解が深まるだろう、という意味だ。第三連では、闇の中でカチンという音がし、山の中でトンネルがつながった、貫通した。その時、われわれは互いをよりよく知ることになるだろう、という。互いを理解するのはアルプスの山を貫通するほどの難事業なのである。そしてそれは、男女のカップルだけではなく、子が親を理解するのも難事業なのではないか。さらには、宗派の異なる人間が、他宗派の人間を理解することも同じく難事業であることをもこの詩は示唆していると考ええる。Jerico への言及は、旧約聖書への言及という点で（‘coda’）収められた詩集の一つ前の詩集 *Sostices* には ‘Jerico’ という詩があり、Joshua, Moses, Paul といった旧約聖書、新約聖書上の人物が、現代に出没する）、父の宗教家としての人生を総体として受容した、受け入れたことを示していると考ええる。それと同時に、Jerico の壁は、次のような世俗的表象ともなっている。即ち、映画『或る夜の出来事』において富豪の令嬢と新聞記者がモーテルの一室に泊まることになり、二人は洗濯ひもに毛布をつるし、ジェリコの壁と称して貞操を守る手立てとする。まことにユーモラスな場面であり、マクニースの詩は旧約聖書のエリコと映画のジェリコの壁とを同時に示しているわけで、世俗的な表象と宗教的表象が同時に成立しているのだ。そこに宗教人フレデリックと世俗の詩人ルイの和解、受容を見て取ることができるだろう。

参考文献

David Fitzpatrick, ‘Solitary and Wild’ *Frederick MacNeice and the Salvation of Ireland* (Lilliput, 2012)

Jon Stallworthy, *Louis MacNeice a biography* (Faber, 1995)

辻 昌宏「ルイ・マクニース最後の詩『コーダ』—エリコの壁の宗教性と世俗性」（『人文科学論集』第 56 輯、明治大学経営学部人文科学研究室、2010 年）